ドクター内田のジャズは友達

△⑳▽

ドイツでVIP扱い ジャズで緊張ほぐす

ヨーロッパでは、古くからジャズを愛する人の多いパリを除くと、ジャズクラブは主な都市にひとつあるかなしかで、大方は国単位でも一軒程度しか見あたらない。だから選択に迷う日本のジャズファンは恵まれていると言えるかもしれないね。

六四年の旅行では、コペンハーゲンの「カフェ・モンマルトル」で、日本では今も人気のピアニスト、ケニー・ドリュウと、当時十六歳ながらその超絶技巧に驚かされた天才ベーシスト、ニールス・ペデルセンを、ストックホルムでは、かの有名な「ゴールデンサークル」ならぬ場末のビアホールの喧噪（けんそう）の中で、地元ミュージシャンをバックにひたすら吹きまくっていた、こびいきクール派テナーのブリュー・ムーアを見つけ出した時の感動――などは今も忘れられない。

シェーリング社へ

だが今回は、この年の旅のきっかけをつくってくれたドイツ・シェーリング社を訪れた時の「ジャズは友達」体験記にしぼってお話することにしよう。

八日間滞在したパリを後にした僕が、大正時代、亡父が二カ月間の船旅で渡欧、二年間の留学生活を送ったスイスのベルン市で、ゆかりの場所に立ち寄りながら、ゆっくり時を過ごしてから、西ベルリンに降り立った時は、九月ももう終わりに近づいていた。

空港には運転手つきのベンツと世話役の社員の方がお出迎えで、のんびりしたそれまでとは一変して、まるでVIP扱いだった。流ちょうな英語で「ミスター・ハーゼ」と名乗ったその男は、親しみやすいようにとの配慮からか、三十四歳だった僕とは略同年配に見えたが、いかにもドイツ人的できちょうめんそのものの性格らしかった。何だか突然片手を挙げて、「ハイル・ヒトラー」なんてやりそうな雰囲気だったなあ。

そのまま新築間もないモダンな「ベルリン・ヒルトン」に連れ込まれた僕は、休むひまなく本社に直行、研究室と工場を次々に案内されたあと、会社幹部と正式のディナー。肩がこって味も分からなかったよ。

クラブへ一目散

「きょうはお疲れでしょうから」。ホテルの部屋まで送ってくれたハーゼ君の姿が消えるのを見すました僕は、そのままタクシーを飛ばして、前もって調べておいたジャズクラブ「ブルーノート」（パリと同じ名前だね）に一目散。ベテランテナーのジョニー・グリフィンとアート・テイラーのドラムといういきな組み合わせのリラックスしたジャズに浸って、まるでホームグラウンドに帰って来たようなほっとした気分だったねえ。

歴史的なライブの名盤「マイルス・イン・ベルリン」

翌日は、一人東ベルリンに向かって戦火の跡に深い感銘を受けた午後、またもやハーゼ君のお出ましで、「ベルリン大学で、外科手術の見学ができるように手配しておきましたから」。まあこれはこれでありがたかったけれどね。

そして午後七時。きっちり盛装したハーゼ君、「きっとお楽しみ頂けると思っていましたから」。話題の「テレフォン・バー」にでも――一瞬よぎったよこしまな期待も、その格好に当然打ち砕かれて、なんと行き先は、「ベルリン国立歌劇場」。おまけに出しものは難解な会話劇の、リヒャルト・シュトラウスのオペラ「カプリッチョ」だ。さっぱり分からぬドイツ語と、幕あいのマティーニ（ドライ＝DRY＝マティーニと注文したら、三杯＝DREI＝来てしまったよ）に酔いのまわった僕は必死に眠気と戦いながら隣を見ると、あれ、ハーゼ君もこっくりやってるぜ。

ジャズ狂同士乾杯

すむのを待ちかねてビアホールに誘うと、内心生き返った思いのハーゼ君、アルコールがまわるにつれ、おやおやビル・エバンス大好きのジャズクレイジーと分かって手を取り合って乾杯だ。そのあとは肩組んで「ブルーノート」に向かったのは言うまでもない。そして翌夜、ライブ盤で歴史に残る、ウエイン・ショーター初参加の「マイルス・イン・ベルリン」に、ハーゼ君共々居合わすことになったんだねえ。

（内田　修）